

■教育目的

臨床検査の行われる現場において実習を実施し、各種検査の意義と実施手技を理解するとともに、臨床検査に従事する態度を養うことを目的とする。病院臨床検査技師の業務と責任を理解し、チーム医療に参画できるようになるために、検体採取、検体検査、生理検査、病理検査、検査精度管理など一連の臨床検査技師業務全般について実践的な検査実務を体得する。

【卒業認定・学位授与の方針：YD-② YD-④ YD-⑥】

■学習到達目標

1. 臨床検査の検査法と臨床的意義を理解し、説明できる(知識、技能)
2. 臨床検査技師の業務を理解し、適切に実践できる(知識、技能、態度)
3. チーム医療における臨床検査技師の役割を理解し、説明できる(知識、技能、態度)
4. 病院における診療システムと臨床検査技師業務との関連を理解し、説明できる(知識、技能)
5. 医療人としての倫理規範を理解し、適切に実践できる(知識、技能)

■準備学習（予習・復習）

予習：臨床検査関連科目の履修内容をしっかり身につけるとともに、実習に携行するハンドブックなどの資料を準備しておく。実習先病院の概要等を把握しておく（30分以上）

復習：実習内容を振り返りよく整理して、学習到達目標の達成度を自己評価し、不十分な点については自ら補うよう努める（10分）

■授業形態

実習・フィールドワーク

■授業内容

実習協力病院の臨床検査部において小人数で臨床検査全般にわたる実際の日常業務に携わり、総合的に臨床実習を遂行する。実習は7月下旬より9月下旬までのなかで指定された期間に臨床検査部の各部門をローテーションし実習を実施する。

No.	項目	授業内容	学修／SBOコード
1	臨床検査総論	臨床検査とは、病院における臨床検査体制	E1-(2)-②-1～7 F-(1)-③-1～15
2	検体の採取法	血液、尿、糞便、胃液等の採取	E1-(2)-②-1～7 F-(1)-③-1～15
3	検体の取り扱い	血液、血漿、血清、尿、糞便、胃液等の取り扱いと保存	E1-(2)-②-1～7 F-(1)-③-1～15
4～5	血液学的検査	・赤血球数、ヘマトクリット値、ヘモグロビン濃度、MCV、MCH、MCHC、白血球数、白血球百分比、血小板数 ・血液凝固検査、輸血検査	E1-(2)-②-1～7 F-(1)-③-1～15
6～7	血液生化学的検査	・血糖値、コレステロール濃度、総蛋白濃度、その他 ・各種酵素活性	E1-(2)-②-1～7 F-(1)-③-1～15
8～9	一般検査	・尿検査 ・糞便検査、胃液検査	E1-(2)-②-1～7 F-(1)-③-1～15
10	血清学的検査	免疫反応を利用した疾病の診断	E1-(2)-②-1～7 F-(1)-③-1～15
11～12	微生物学的検査	・細菌の分離と培養および同定 ・真菌の分離と培養および同定、ウイルスの検査	E1-(2)-②-1～7 F-(1)-③-1～15
13	生理機能検査	心電図、心音図、筋電図、脳波	E1-(2)-②-1～7 F-(1)-③-1～15
14	超音波検査	主要器官の超音波検査	E1-(2)-②-1～7 F-(1)-③-1～15
15	病理学的検査	病理組織標本の作成	E1-(2)-②-1～7 F-(1)-③-1～15

■授業分担者

田中 千実、池田 理子、花尾 麻美、櫻井 進(臨地実習到達度評価)

■ 課題（レポート、試験等）のフィードバック及び成績評価方法

臨地実習到達度評価を含めた実習試験(50%)と実習指導臨床検査技師の所見・評価(50%)から総合的に判定する。

■ 単位認定方法

上記の成績評価で基準点を超えた者に単位を認める。

■ 教科書

特に指定しない。

■ 参考書

自作実習関連資料等

■ その他

学外の病院・医療機関において3週間の実習を行う。ただし病院・医療機関によって最大11週間の場合がある。実習内容は、実習先の病院の特徴を生かした内容となる。実習に向き合う姿勢が実習成果に大きく影響し、能動的でかつ臨機応変な対応が求められる。真摯で主体的な実習態度が重要である。実習中の服装・ふるまい・持ち物には特に注意が必要である。臨地実習直前(7月下旬～8月上旬)に 臨地実習到達度評価(実習)を行う。